

家庭における道德教育の意識研究

—しつけ教育を中心に—

熊 木 美 枝 子

A Study on the Moral Education at Home

— Centering around Disciplinary Education —

Mieko KUMAKI

It seems to me that there are two points to moral education. The first is to bring up a child to be a complete and harmonious individual (This can be accomplished with the aid of textbooks and other books from outside the home).

The second important point is to bring up a child to accept the morals of his society.

A child spends most of his time at home; therefore the majority of development is accomplished in the home.

Administering discipline and teaching the customs of his society are the most important. The characteristics of a child are formed mainly from the attitude or example of the parents, and by the parents' demands upon him.

In this study I gave my due consideration to (1) mother and discipline (home); (2) job and discipline (society); (3) school and discipline (school).

1. はじめに

道德教育は、2つに区分される。第1は、全教科によって人間そのものを全人間的、調和的に陶冶することであり、第2に社会の習慣から発達した道德を、とくに教育し、身につけるものであるといえる。道德的判断が不十分な児童初期の道德指導は、デューイ (J. Dewey) がパーソナリティ (人格性格) というものは「習慣の束」であるといっているように、良い人格とは、良い習慣を束にしてもっているものといえる。そこで前段階的なしつけ (child discipline) と習慣形成が中心と考えられるのである。なぜなら家庭における道德教育の研究であるからである。しつけは、社会に正しく適応できる行動を方向づけるために、その社会に受け入れられている行動基準に一致させ、礼儀作法、基本的行動様式を、自覚的、自発的に、習慣化をはかることである。昔から「親は子どもの鏡である」などといわれるように、親が家庭で子ども達の目の前に示している行動上の見本は、おのずから子ども達にとっては、模倣のお手本となったり、反省の材料となっていることがいえる。

そこで、本稿では、家庭の教育的機能としてのしつけの重要性を認め、家庭環境の静的環境 (住

居・人的構成など)と、動的環境(周囲の大人の態度や扱い方)の2つの環境のうち、後者を主に、家庭・学校・社会の3項目のしつけについて調査結果を中心に現状を把握しようとするものである。

2. 調査について

この調査は、親や家庭のものが、日頃どのような態度で子どもに臨んでいるか。またどのようなことを子どもに期待し、要求しているかという調査である。親の態度や子どもへの要求は、子どもの人格形成に、きわめて大きな影響を与えるものとみられるので道徳性の評価において重要とみられる。

1) 調査対象

文京区内¹⁾の6歳までの家庭環境としては、住宅街(76.1%)、商店街(21.1%)、その他(2.8%)と恵まれた環境に育った小学生1年、2年、3年の親218名を対象に質問紙調査を行なった。協力校の学級担任が、調査前に、調査目的を親に配布し、了解を得てから依頼し、回収した。本論の表において小学1年= α 2年= β 3年= γ と略することにする。

2) 調査項目

20項目の質問紙調査を行ない、その内容を大きくわけ、①家庭内における児童の一般的行動特徴②親が理想とする道徳的性格、③学校教育における道徳、これらをしつけ中心に分類してみた。

3) 調査期間

昭和47年12月14日～12月18日

3. 調査結果とその考察

1. 家庭におけるしつけ

子どもは、生活の大部分を家庭で過ごし、父母の養育を受けている。そのために、家庭の環境条件や人間条件が、子ども等の性格を育てあげているといえる。親と子が共同生活を行なうということの中では、かならずしつけが意識的に無意識的に絶えず行なわれているのであって、このことは、人生観に何らかの影響を及ぼすものである。

一般に家庭教育は、出生と共に始まって青少年時代まで続くといわれ、生後6歳に至る幼児期の教育が、もっとも重要とされているものである。表2の結果をみると6歳まで(45.1%)と約半数の親は、6歳までのしつけをあげているが、小学校3年まで(24.7%)をあげているのが、あまりに多いのには当惑せざるをえない。6歳までの幼稚園教育終了までに、家庭での基本的習慣は、なされていなければならない。ここで述べている習慣とはしつけの中に含まれる重要な方法である。いつも善なる行動状態にするためには、ただ1度の叱責や賞讃で、それが抑制されたり、助長されるとは考えられないのである。くり返し実行することにより、容易に習慣が身につくものである。そして道徳的習慣は、行動的な習慣だけでなく、価値判断や、心情、態度の上に望ましい習慣が形成される時、単に習慣的行動にとどまらず、自主的に行動するのがあらわれるものである。結果から、親に望む、就学前のしつけは、習慣形成を行なってもらい入学と同時に道徳的習慣を家庭・学校・社会とが三者一体となって一貫性のある方針のもとで行なわれることを期待したいものである。家庭での“親からみた子どもの一般的行動状態”についての調査結果は附録として掲載しておく。次に表3、表4の“理想のしつけ者”と“現実のしつけ者”についてみていくことにする。戦

前にくらべると父親の育児に対する関与は大きくなったといわれているが、子どもにとって恐ろしい存在であった父親の座が、母親に移行してしまったといえる。表4「母親」(71.9%)の中には「しつけは日常的なことが多いので、子どもと接する時間の多い母親が必然的に主導権を握ってしまう」というのが圧倒的に多かった。このことは後に(1)母親としつけの中で述べることにする。2位に表3、表4とも「両親」が続いている。「父親でないと出来ないことと、母親にしか出来ないことがあるので」「父母は自分がしつけられた経験によって、その採択と伝達を決めることが可能であるから」。わずかではあるが「祖父母」があげられていたので、これも生活習慣のしつけに果す役割として無視することができない。祖父母の子どもに対する態度で問題になるのは、過保護な態度であるといえる。祖父母は自己の心身の弱まりや責任のない立場から、どうしても溺愛的態度になりやすい。これらは今後の課題として解決しなければならないが、もっとも大切なことは、親がはっきりした自信ある安定した態度で子どもに接し、しつけを行なうことである。ニールが「およそ問題の子どもというものとは決して存在しない。存在するのは、ただ問題の親ばかりである。これは全き真理ではないかもしれない。しかしほとんど全き真理に近い。問題の子どもを生ぜしめるのは、たいてい親たちが子どもの性質を理解しないがためである。さもなくば親たちが、自分自身の性質を了解しないために、問題の子どもを生ぜしめるのである」²⁾と述べている。

表 1. しつけは必要である
と思うか () %

	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
必要と思う	212(97.2)
必要と思わない	6(2.8)

表 2. しつけは何歳頃までが理想と思うか () %

	α	β	γ	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
3歳頃まで	25(31.6)	15(22.7)	17(25.4)	57(26.6)
6歳頃まで	32(40.5)	34(51.5)	29(43.3)	95(45.1)
小学3年頃まで	19(24.1)	14(21.2)	18(26.9)	51(24.1)
無解答	3(3.8)	3(4.6)	3(4.4)	9(4.2)

表 3. 理想のしつけ者は誰
がよいと思うか () %

	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
父 親	12(5.8)
母 親	137(64.5)
両 親	48(22.9)
家族全員	8(3.2)
母親・祖母	1(0.4)
祖 母	2(0.9)
無 解 答	4(1.8)

表 4. 現実に子どもをしつ
けているのは誰か () %

	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
父 親	6(2.8)
母 親	151(71.9)
両 親	42(19.6)
家族全員	3(1.4)
母親・祖母	7(3.4)
祖 父	1(0.4)
祖 母	1(0.5)

表 5. 家庭内での子どもとの話
し合いはなされているか () %

	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
a 話し合いの時間を きめてある	4(1.9)
b 話し合いの時間は きめてないがよく 話す	95(43.6)
c 自然に話す	115(52.6)
d 話し合わない	4(1.9)

2. 親の理想とする道德的性格

両親は、最初の教育者といえる。子どもが社会に適応できるか、できないかという鍵を握ってい

るのも両親であるといえる。そこで親が子どものしつけ指導をするにあたって、まず子どもの道徳的知識理解度やその独自性を理解しなければならない。ただ権威による抑圧ではなく、人格を育てるという態度を忘れないこと。そして将来の自主的態度の基礎を育てるものであることが必要であるし、ただ機械的にしつけるのではなく、道徳的理解、判断の健全な経験的基礎を持たせるものであるべきである。

これらのことを考えながら実際に、親が“子どもにこれだけはしつけておきたい”表6。“現在の子どもに望むこと”表7。というような価値観、又理想像など心にいだいている、あるべき子どもの姿（イメージ）も、母親（高率しつけ者）の養育態度に影響をもつ重要な要因としてあげなければならない。結果から、子どもに対する価値観は個人によっても違われ、時代や社会の変化地域環境などの相違によっても異なるといえる。

表 6. 子どもに望むしつけ

人 気 の あ っ た 項 目	他人に迷惑をかけない 挨拶のできる子 自分の判断で行動のできる子 他人を思いやる心 善悪の判断ができる子
人 気 の な か っ た 項 目	人を尊敬すること 教 育 人のものをとらない 整理整頓 ものを大切にする

表 7. 現在の子どもに望むこと

人 気 の あ っ た 項 目	明朗な子 健康なからだ 自分の意見を主張できるねばり強い子 礼儀作法 子どもらしい子ども
人 気 の な か っ た 項 目	たくさんの本を読むこと すすんで勉強してほしい 友人と大人に話す区別 よく聞く、よく見る 助けあう心

表6、表7からみても「自分の意見をはっきり主張し行動力のある子」を望む親が多いこと。戦前においては、親のいうことを黙って聞くのが子どもらしい子どもといていたが、ここにも時代のズレが当然みられたといえる。又礼儀作法といった形式的な面と、自分のことは自分でといった生活習慣の自主性なども重視されている。「現在の子どもは、社会が子ども 天国的世の中のため自分のことをやらず求めることのみが多すぎて頭でっかちが多い」「口先だけでなく 実行力のある子どもを望む」という意見が多かった。戦前は、親の選ぶ項目として勤勉な子が登場したのであろうが、このことを親は願わないのではないが今や子どもが戦前に比べて親に対してもっとも反抗的で不従順で挑戦的である現状から明朗快活であることを願っているのがいえる。

表8は“現在の子どもの困っている点”をあげたが、ラジオ・テレビなど、いわゆるマスコミが、家庭に深く浸透し、常に粗悪な文化財を氾濫させているといえる。テレビなど外部知識をあびせられ自分で発見することを知らない子ども。非常にマスコミに影響されているといえる。そこで親がマスコミを利用することにより家庭と社会が結びつくといえる。

子どもの性格を左右するもので、子どもにとって影響力の大きいのが友達関係といえる。子どもが何気なくつき合っている友達について表9は2つの項目を示し解答を得たものである。子どもの友達には気になる（29.3%）とかなり高率を示している。親の理想の友達として「性格がやさしく思いやりのある子」「善悪のはっきりしてる子」「竹馬の友」などがあり「低学年においては、子どもの良い悪いがあってもよいし親が友人を選ぶより自分で自分にあった友を選ぶと思う」「親がよいと思っても子どもが気にいらなければどうにもならない」と子ども中心を考えている傾向もみられた。

表 8. 現在の子どもの困っている点

テレビの見過ぎ(テレビの影響が大きすぎて) 子どもらしい発見がない
豊かな物質社会で物の大切さを知らない
責任感が弱く、要領がよい
口ばかり達者で行為が伴わない
挨拶ができない

表 9. 子どもの友達について

	() %
	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
別に誰と限定しないで誰でもよい	146(67.0)
子どもの友達は気になる	64(29.3)
無 解 答	8(3.7)

4. ま と め

1. 母親としつけ (mother and discipline)

表4の中の“現実のしつけ者”の第1位「母親」(71.9%)に注目してみる。母親の家庭における役割は、戦後大きな変化がみられ——…に仕える——という戦前のようなことは少なくなったといえる。現代の母親は封建的な環境をあらため、母親の座を造りあげてきたが実際にはしつけの不安がつきまわっているものである。“何故母親がしつけを行なうのか”の結果「母親との時間的接触が一番多いから」など戦前に比べると時間的余裕はあるが、その反面母親の子どもに対する過剰干渉が子どもの自主性を失わせ、教育ママといわれるようになるといえる。これら母親に必要なのは育児についての自信である。子どもの個人差を理解し、更にもどのようにしつけていったらいいかという点について目標を定めることであるといえる。子どもとの結合を強化するためには、スキンシップが効果的であるといえる。スキンシップした結果子どもの依存性が強くなると、そのことが、子どもは自分から離れていないという実感となって母親自身を安定させるといえる。

表10は“日常生活における子どもの叱り方”。表11は“叱り方の方法”。の結果であるが一例としてみていくことにする。表11の“親の叱り方”で「言葉でおこる」(77.3%)と結果がでた。もし体罰をくわえる率が多かったとしたら、今日のように母親と子どもが朝から晩まで、狭い部屋で顔をつきあわしている生活では、教育の効果が、とぼしいといえる。昔のように家族全体が秩序を守っているなかでの体罰は秩序としてうけとられるが、母親と1対1での体罰は個人的な侮辱としてしかうけられないといえる。これらのことから母親と子どもの間の体罰は、教育の手段として、きき目が無いといえる。そこで子どもが責任のもてる範囲で行なった悪に対しては、とがめる必要がある。それは子どもが理解できるように言葉でいうべきである。将来子どもが悪に対しても説得によってたかえらるという信念をもつためにも。

表10. 子どもの叱り方 () %

	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
① 一方的に親から「いけない」と叱るそれから言いわけをきく	79(36.3)
② 言いわけを聞いてから叱る	123(56.4)
③ 両親ともあまり叱らず子どもの判断にまかせる	9(4.1)
④ 無 解 答	7(3.2)

表11. 親の叱り方 () %

	α	β	γ	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
ぶ つ	2(2.5)	5(7.4)	2(2.9)	9(4.3)
体 罰	3(3.7)	0	2(2.9)	5(2.2)
言葉でおこる	66(81.5)	50(73.5)	53(76.8)	169(77.3)
言葉・ぶつ	10(12.3)	13(19.1)	12(17.4)	35(16.2)

2. 仕事としつけ (job and discipline)

「若者よ、君の仕事に男子の手の刻印を押すのだ。たくましい腕で斧や鋸を使うことを学ぶがよい。梁を四角に削ったり、屋根のてっぺんへ登ったり棟木を架けたり、支柱やつなぎ梁で、それを

固定したりすることを学ぶがよい。そして大きな声で妹にむかって仕事を手伝ってくれと呼ぶのだ。これは妹がきみにレース編みを手伝ってくれといったように。」⁸⁾

これは、ルソーのエミールの中にある、まったく素朴な仕事への評価を示したものであり、彼は、上記の仕事観からエミールを指物師にさせるのが、もっとも適切であろうと述べているのである。

なぜならば、その仕事は清潔で、創意工夫があふれたもっとも好ましい仕事の1つであるからである。我々は、このことから仕事のもつ意味が、どんなに人間の存在にとって本質的なものであるか、あらためて検討せざるおえないのである。

例えば、仕事をしない(伴なわない)しつけは、何をめざしているのかを私は困惑せざるおえない。表12にある結果が事実であるとするならば、現在の家庭でのしつけは少なくとも素朴な仕事に対して、十分な評価とアプローチが行なわれているとはいいがたい状態である。

表12. 子どもに決った仕事を与えているか () %

	α	β	γ	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
与えている	25(30.9)	19(27.9)	30(43.5)	73(34.1)
与えていない	56(69.1)	49(72.1)	39(56.5)	144(65.9)

さて、仕事あるいは決った仕事を小学校低学年に与えるということは、何を意味するであろうか。前記ルソーにみられるような、流動的な全人間的な仕事への対決はさておき、子どもと仕事の意味を考えてみたい。ある仕事に身をうちこむということは、苦痛も伴うし、努力も

必要となる。しかしそれを仕上げたときの満足感、喜びを生み、更に次の意欲を呼ぶのである。そこに仕事(労働)への価値観が正しく成立したといえるのである。調査結果の「仕事を与えている」の多くは「そうじ」「おつかい」「食事の後片づけ」「小鳥の世話」「布団の上げおろし」といったものである。これら、誰にでも出来そうなものではあるが、ほとんど他律的で、大人の励ましや賞賛が必要とされる。ここで大切なことは親の言葉である。簡単なことでも実践の習慣化をはかるためには大人の暖かい配慮が大きな原動力となっているといえる。そこには仕事によって与えられたもの「自分の感情や欲望をおさえる心」⁴⁾ 自制心。「たえしのぶこと」⁵⁾ 忍耐力。「心をあわせること」⁶⁾ 協力。家庭愛。などがつちかわれるものである。

一体、なんらかの意味で仕事の伴なわないしつけは、何が期待されるであろうか。このとき子どもは、はなはだ非現実的になり、道徳的判断力は、親の懸命な知的努力によってある程度果たすことが可能である。しかし本質である習慣化、又は形式化としての義務的な仕事が軽んじられていた場合、子どもは、やがて自己の道徳的判断と実行力と自己の欲求の渦の中でますます苦しむことになりはしないだろうか。以上表12の結果を参考に一考察を行なってみたものである。

3. 学校としつけ (school and discipline)

しつけの根本的な次元は、家庭、特に母親の座に把握されていることは前節までにみたとおりである。ここでは学校におけるしつけの可能性について考察してみたい。調査結果によれば表14では教師達は、少なくとも児童(1~3年)から絶対視される傾向が強いようである。小学校低学年頃までは、子どもは教師を絶対視している。教師と子どもとの関係が、幼児期における親子関係に近いものであるときは、子どもは教師との同一化を求め、教師がしつけ教えこむことはもちろん日常行動の中に含まれている価値は取られ内面化が行なわれていく。子どもが成長していくにつれ教師を絶対視することは漸次にみられなくなるが、よい教育関係が存在しているときには、それまでに育成されてきた価値観を明確にされ、強化されていくものである。一方で親は、道徳教育に対する学校への期待は表13のように、はなはだ稀薄である。表13・14の内容が何を示すものであるか検討

してみたい。

例えば、ある父兄の学校教育への期待を参考に記してみたい⁷⁾。すなわちここでは、学校教育への期待=(1)社会訓練としての場、(2)プロ教育者としての教師、(3)学校でのしつけも積極的に、(4)権威と対話。家庭教育への期待=(1)人間愛、(2)健康管理、(3)自主の精神、(4)しつけ。となっている。ようするに学校には社会的訓練と教師の人間性が期待され、家庭にはしつけ（この場合は広義のものが述べられているが）が位置づけられている。

表13. 道徳教育は学校か家庭か

() %

	α	β	γ	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
学 校	18(22.2)	14(20.6)	19(27.5)	51(23.5)
家 庭	47(58.0)	37(54.1)	37(53.6)	121(55.2)
両 方	13(16.1)	11(16.2)	7(10.1)	31(14.1)
無解答	3(3.7)	6(9.1)	6(8.8)	15(7.2)

表14. 教師観（先生に対する親から

みた子どもの目)

() %

	α	β	γ	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
絶 対 視	46(56.8)	37(54.1)	30(43.5)	113(51.5)
ふ つ う	26(32.1)	21(30.9)	29(42.0)	76(35.0)
わからない	5(6.2)	7(10.6)	8(11.6)	20(9.5)
無 解 答	4(4.9)	3(4.4)	2(2.9)	9(4.0)

本来、学校生活は家庭生活において、子どもが親しく学びとった価値観から成長されなければならない。

例えば、デューイは、家庭と学校を次のように関連させている。

「家庭は、児童が養育されてきたところの社会生活の形態であり、且つ、それと関連して児童は、道徳的訓練を受けてきたのである。家庭生活において結び合わされた諸々の価値に関する感覚を深化し、且つ拡張することは、学校の仕事である⁸⁾。そこで道徳教育は、社会生活の一様式として、学校教育に集中されねばならないとデューイは言っている。この場合の最善の学校での道徳的訓練は、仕事と思考を一致させながら、他の人々と好ましい人間関係を結ぶことである。

調査結果（表13、14）においても、デューイの述べる価値観の諸関係とまったく符合するものであった。すなわち、家庭でのしつけが基盤とされ、その上で教師が尊敬されねばならないというものである。それゆえ教師への期待は、現代の社会においても、ますます大きな比重を占めているといえるのである。

学校としつけの問題は、狭い立場から検討されるのではなくて、学校と教師はできうるかぎり、現実的、流動的、創造的な立場で、検討されねばならない。

以上の問題に対しても、本論においては、事実の指目的のみで満足すべきであろうと思う。

現代社会が資本主義経済を軸として高度の生産力と繁栄を、おうことには成功したが、全人間的な視点からみた場合、当然1つの分岐点にあることはもはや疑いない。それゆえ、今こそ道徳及び道徳教育の可能性が叫ばれねばならないであろう。最近の新聞に子どものしかり方について「金銭的背景にある労働の貴重さをきちんと教えようという配慮がなく、即物的なしかり方だ。しかる確信がもてないから、底の浅いしかり方になってしまう。これをつきとめれば、家庭が、家庭教育の役割を放棄していることにつながる⁹⁾と述べてあるように、子どもの教育を今一度、再検討する必要があるといえる。

註

1) 文京区立駕籠町小学校

- 2) 児童心理 8月号 p. 98 金子書房 1972
- 3) エミール p. 206 河出版
- 4) 新村出編 「広辞苑」 岩波書店
- 5) 同 上
- 6) 同 上
- 7) 道徳教育 No. 116 p. 76~79 明治図書 1970
- 8) デューイ 「経験と教育」 原田訳 p. 148 春秋社
- 9) 母親が子どもをしかるとき 朝日新聞 1973. 8. 14

附 録

親からみた子どもの一般的行動状態 () %

		$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$	$\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$
		は い	いいえ	無解答
イ	ハイ・イエの返事ができない	71 (33.0)	138 (62.7)	9 (4.3)
ロ	机の中の整理ができない	108 (48.9)	107 (49.7)	3 (1.4)
ハ	遊んだ後の手洗いができない	49 (22.6)	166 (76.0)	3 (1.4)
ニ	宿題や提出物を忘れる	43 (20.2)	171 (77.9)	4 (1.9)
ホ	モジモジしていて自分の思っていることを発言できない	97 (44.5)	117 (53.6)	4 (1.9)
ヘ	常にまわりを気にしている	71 (32.9)	144 (65.7)	3 (1.4)
ト	仕事を途中でやめてしまう	68 (31.4)	146 (66.7)	4 (1.9)
チ	物を粗末に扱う	87 (40.8)	126 (56.8)	5 (2.4)